創作狂言「里見八犬伝 其ノ壱（エピソード ワン）」ガイド

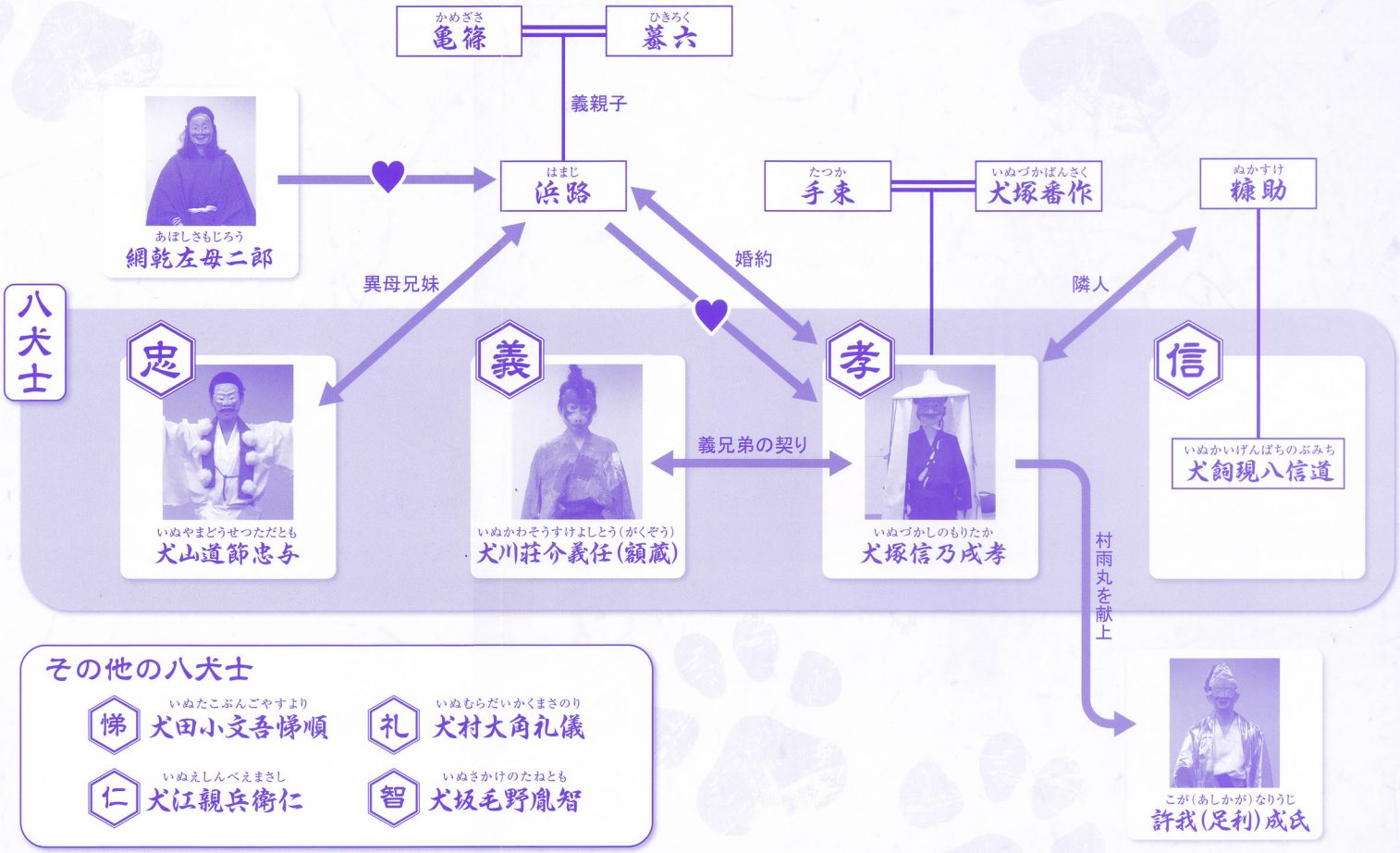
狂言について

「狂言」とは、「能」とともに現存する最古の舞台芸術です。狂言が本格的に登場したのは14世紀頃で、伝統を守りながら、約650年間演じられてきました。

そして、その狂言の劇中で謡（うた）われるのが「狂言謡（きょうげんうたい）」です。狂言謡とは室町時代の流行歌や狂言独自の創作歌謡で、美しい旋律を持つ「小歌」とリズミカルな言葉の言い回しを楽しむ「イロ詞（ことば）」があります。狂言師は、この狂言謡の稽古を通して発声や体の動きの基礎を身につけます。

今回の公演でもこの狂言謡が取り入れられています。曲名は「〇〇〇」。とある動物についての謎かけで、実際の狂言では「隠狸（かくしだぬき）」という演目に登場します。さて、何の動物でしょうか？ 詞章（しょう）（歌詞）と舞から想像してみてください！

あの山から　この山へ
飛んで来るは　何ぢやるろ
頭（かしら）に二つ　ふつぷつと
細うて長うて　ぴんと跳ねたを
ちやつと推した　〇〇〇ぢや



その他の八犬士

- 悌 いぬたこぶんごやすより 犬田小文吾悌順
- 礼 いぬむらだいかくまさのり 犬村大角礼儀
- 仁 いぬえしんべえまさし 犬江親兵衛仁
- 智 いぬさかけのたねとも 犬坂毛野胤智

南総里見八犬伝について

『南総里見八犬伝』は江戸時代後期の作家曲亭馬琴（きょくていばきん）によって、文化11年から天保13年まで28年の歳月をかけて執筆された長編読本（よみほん）です。物語は「勧善懲悪」を描いており、それぞれ仁義礼智忠信孝悌（じんぎれいちちゅうしんこうてい）の玉と牡丹の痣を持つ八犬士が様々な苦難を乗り越えて活躍していくものとなっています。

昨年の『其ノ零（エピソードゼロ）』では八犬士誕生の物語が演じられました。今回の『其ノ壱（エピソードワン）』はその続きとなり、4人の八犬士が登場します。今作では里見八犬伝前半の主人公とされる犬塚信乃の八犬士としての覚醒、信乃と後に犬川荘介となる額蔵との出会い、犬飼現八との対面などが演じられます。

（参考資料）
小林責（監）、油谷光雄（編）『狂言ハンドブック』（1995）三省堂
西野春雄、羽田昶（編）『能・狂言事典』（1987）平凡社
曲亭馬琴（著）、石川博（編）『南総里見八犬伝』（2007）角川学芸出版
湯浅佳子（編）『南総里見八犬伝 名場面集』（2007）三弥井書店
『日本古典文学大辞典』（1983～1985）岩波書店